

# 近世初期刊行の佚名「四体千字文」の諸版と変容

史 清 晨

## 章立て

はじめに

第一章 篆楷草行型の「天文一九年日州本」

第二章 篆隸楷草型「四体千字文」諸本

第三章 諸本の異同について

第四章 佚名「四体千字文」の機能の変遷

おわりに

## はじめに

近世初期に開版した佚名「四体千字文」を大まかに書体別で分類をすると、篆楷草行型と篆隸楷草型と分けられる。篆楷草行型は散逸本であり、「天文十九庚戌歳秋八月望日」の年記と「紫陽日州田島莊弓削雅楽入道交雲居士僅置」の署名がある「四体千字文」一本である。篆隸楷草型の「四体千字文」の伝本には一四種の伝本が確認できた。次の通りである。

- ① 「慶長壬寅刊 金宣開版」の刊記がある本
- ② 「慶長甲辰孟春日 下雉酒輦堂新葉」の刊記がある本
- ③ 「慶長丙午歳 春枝開版」の刊記がある本
- ④ 「慶長丙午記 金宣開版」の刊記がある本
- ⑤ 「慶長丙午記 讚開版」の刊記がある本

- ⑥ 「慶長戊申 新七開版」の刊記がある本<sup>2</sup>
- ⑦ 刊記なし「秀意刊行」の刊記がある本
- ⑧ 「正保貳乙酉曆 三條通菱屋町ふ屋 林甚右衛門」の刊記がある本
- ⑨ 「正保貳乙酉曆 大坂順慶町一丁目筋 田原平兵衛梓」の刊記がある本
- ⑩ 「正保二乙酉孟冬下旬」の刊記がある本
- ⑪ 「延宝三乙卯初春 青木勝兵衛」の刊記がある本
- ⑫ 刊年なし「林正五郎梓」の刊記がある本
- ⑬ 刊年なし「林正五郎梓」の刊記と末葉「一止人藏版書目録」の奥書「皇都書肆寺町五条上ル田丁額田氏伊勢屋正三郎梓」のある本
- ⑭ 「乙卯六月吉日 松会開板」の刊記がある本

その他に、刊記のない本数本<sup>3</sup>が管見に入った。

本研究では、ひとまずこれらを天文一九年日州本、慶長七年金宣本、慶長九年酒輦堂本、慶長一一年春枝本、慶長一一年金宣本、慶長一一年讚本、慶長一三年新七本、秀意本、正保二年林甚右衛門本、正保二年田原平兵衛本、正保二年本、延宝三年青木勝兵衛本、林正五郎本、伊勢屋正三郎本、延宝三年松会本、刊記のない本と呼ぶこととする。

管見の範囲における伝本の諸本は、書誌的特徴の区別以外に、収録されている文字の書き方の方にも区別がある。本研究では、室町末期から近世初期にかけて刊行

された和刻本の「四体千字文」諸本におけるいくつかの書誌学的差異に基づいて、主に現存諸本のそのものや書誌学的特徴の調査と、文字の書き方の特徴の比較を行い、これまでに確認し得た延べ一五種の篆隸楷草型「四体千字文」を版種別に分類する。さらに、二種の『懷宝節用集綱目』に収録される「四体千字文」を合わせて分析しながら、四体千字文の変容をまとめ、版種の変化に現れた「四体千字文」の機能の変遷を明らかにする。

## 第一章 篆楷草行型の「天文十九年日州本」

和田維四郎『訪書余録』の「慶長以前に於ける仏書以外の刊本の著名なるもの」に「天文十九庚戌歳秋八月望日」の年記と「紫陽日州田島莊弓削雅樂入道交雲居士僅置」の署名がある「四体千字文」の書名ならびに巻末刊記が載せられている<sup>4</sup>。『日本古刊書目』<sup>5</sup>・『日本古刻書史』<sup>6</sup>・『日本古印刷文化史』<sup>7</sup>にもこの本が掲載されている。いずれもこの「四体千字文」の開版について、同じような刊記の提示にとどまっている。

天文十九年日州本「四体千字文」の内容について、若山甲蔵は昭和九年（一九三四）に東京朝倉屋主人所蔵の刊記のない本「四体千字文」を過眼したところ、「古味の饒かなもので、何だか日向版（天文十九年日州本）のやうな気がします」<sup>8</sup>と指摘したが、今までの研究がこの刊記のない本「四体千字文」は慶長の末頃のものだと鑑定されている。後に蒐集した諸版はほとんど東京朝倉屋主人所蔵の刊記のない本「四体千字文」と同版であり、「正保二乙酉孟冬下旬」の刊記がある本（正保二年本）と『旧刊景譜』に掲載する天正二年刊本（天正二年堺本）を過眼したが、いずれも天文十九年日州本と同版であることが確認できなかった。現時点では、天文以後の所蔵や翻刻本も見出すことができず、記録のみを証拠としており、天文十九年日州本は今日、世に存在することが確認できないままである。本節では僅かに残されている巻末刊記をもとに、天文十九年日州本の開版について考察することにした。

前記いくつかの古刻書史に載せられている天文十九年日州本の刊記は次の通りである。

夫附言増広古文真草行凡四千字、為誨童蒙、合他力刻諸梓以伝世矣

紫陽日州田島莊弓削雅樂入道交雲居士僅置

天文十九庚戌歳秋八月望日

刊記にある「紫陽日州田島莊弓削雅樂入道交雲居士僅置」によると、天文十九年日州本は「弓削雅樂入道交雲居士」という人が開版したことがわかる。若山甲蔵氏が『日向文献史料』において、田島莊「弓削氏系図」にある「雅樂入道恕信伝誉交雲」の名前により、上梓人は弓削五郎大膳亮の三世の孫、弓削治部左衛門の三男、百貫地元祖弓削筑前の弟で、雅樂入道交雲、法名恕信・伝誉と確認している。これ以外、上梓人「弓削雅樂入道交雲居士」の生涯は全くしれないが、署名の内「居士」という言葉があり、『広辞苑』の積義「①学徳が高くして仕官しない人。隠者。処士。②「仏」(梵語 *prati-pati*: 家主の意。資産家の家長を指した) ③在家で仏道の修行をする男子すなわち優婆塞の敬称。近世は在家の禅の修行者の敬称。④男子の戒名の下に付ける語」<sup>9</sup>によると、二つのイメージが示される。一つには、「学徳が高くして仕官しない人」により、「弓削雅樂入道交雲居士」は学者として、「四体千字文」を上梓したことである。二つには、「在家で仏道の修行をする男子すなわち優婆塞の敬称。近世は在家の禅の修行者の敬称」により、「弓削雅樂入道交雲居士」は仏教関係の人として、「四体千字文」を上梓したことである。

当時の「日州田島莊」は、宮崎郡（日向国）佐土原（今宮崎県宮崎市佐土原町）にある。天文年間の田島莊所在の佐土原には武将伊東義祐（永正九年（一五一一）～天正一三年（一五八五））<sup>10</sup>が建築し、数年間居た佐土原城（今宮崎県宮崎市佐土原町上田島佐土原城跡）がある。

当時の佐土原における、文化繁盛の様子は『日向地誌』に記載がある。次の通り

である。

義祐、性豪奢にして、一時兵を強ふし、武威を近国に震ひければ、凡一材一芸の士より、農工商の徒に至るまで、四方より輻輳し、郊外市中も屋宇櫛比し、鶏鳴狗吠相聞四境に達する景況なりと古伝記にも見えなれば、当時都於郡より佐土原に連なり、繁華の一大城なるべし。都於郡は伊東氏の本城なれども、義祐は始終佐土原に居れり<sup>12</sup>。

これによつて、若山甲蔵氏は当時の佐土原は日向の文化中心地であり、一材一芸の士が四方より輻輳していたことから、この「四体千字文」を上梓する程の篤志好学の人も生まれた訳であると指摘している。厳密な証拠はないが、天文一九年に「四体千字文」が上梓された頃、当時の領主伊東義祐はまだ威武を振わせていたため、上梓にも間接的な関係があつたらしいと推測している<sup>13</sup>。若山甲蔵氏の指摘だけでなく、木宮泰彦氏も『日本古印刷文化史』に「薩日地方に於いては、禅院の開版として、延徳四年（一四九二）版の大学章句（薩摩桂樹院刊）、享祿三年（一五三〇）版の聚分韻略（日向真幸院刊）のことは前節に述べたが、学者・武士の刊行したものには、文明十三年（一四八一）版の大学章句と聚分韻略、天文十九年（一五五〇）版の四体千字文等がある」<sup>14</sup>と指摘している。これらの論述によると、天文十九年日州本は学者・武士の主宰によつて刊行されたという見方が主流である。僅かに『訪書余録』・『日本古刊書目』・『日本古刻書史』・『日本古印刷文化史』に提示される巻末刊記によると、天文十九年日州本は篆書・楷書・草書・行書を用いた「千字文」を刻んだものである。刊記に明記した「為誨童蒙」という言葉によると、この「四体千字文」開版の目的が童蒙教育にあることがはっきりとわかる。篆・楷・草・行四種類の書体で刻んだのは、この「誨童蒙」のための書道教育の意味合いを含んでいるからである。天文十九年日州本は最古の四書体を用いた開版された

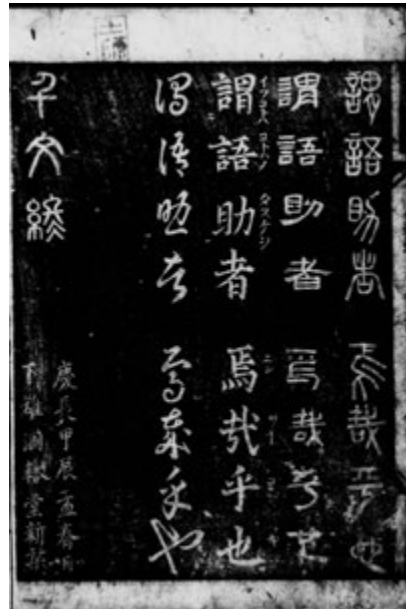
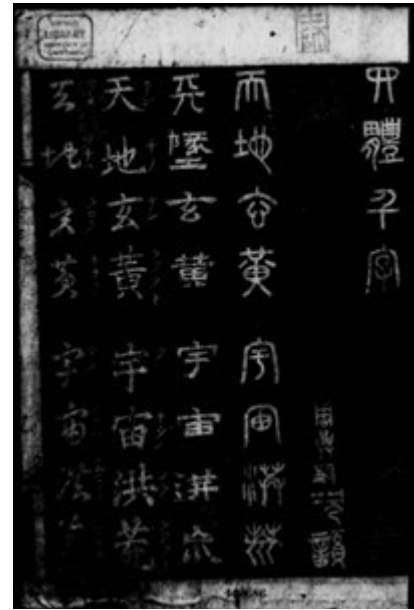
「四体千字文」として、書字習に於いて、習字手本を取り扱った書物と推察してよいであろう。

## 第二章 篆隸楷草型「四体千字文」諸本

佚名「四体千字文」の慶長七年金宣本、慶長九年潤轍堂本、慶長十一年春枝本、慶長十一年金宣本、慶長十一年讀本、慶長十三年新七本、秀意本、正保二年林甚右衛門本、正保二年田原平兵衛本、正保二年本、延宝三年青木勝兵衛本、延宝三年松会本、伊勢屋正三郎本、刊記のない本諸版の所蔵先及び書誌的特徴については文献と現物の調査に基づいて確認したものである。『日本古印刷文化史』・『早稲田大学図書館蔵尾形裕康収集千字文資料目録』・『我国における千字文の教育史的研究』の「千字文資料編」などの記載、または「新日本古典籍総合データベース」・各図書館や蔵書機関での調査及びそれらの蔵書検索サイトの検索結果により確認し得たものである。可能な限り徹底的に収集したが、検索方式の都合で見落としがある場合がある。

管見の範囲において、丹念に見比べると、細部には差異が見られる。例えば、慶長九年潤轍堂本（カリフォルニア大学バークレー校東亜図書館所蔵）の題名のところに「文」が漏刻され、正文もごくわずかだが書き方が他の伝本と微妙に異なる。だが、全体的な一緻性を考慮すれば、このような微妙な違いは改版とは言うより板木を刻む際に生じる誤差に過ぎない。以上一五種の伝本の主な差異は彫刻方法にある。板木の彫り方の差異によつて、ア）陰刻本・イ）篆隸陰刻楷草陽刻本・ウ）陽刻本に分類することができる。分類は以下のようになる。

図一 陰刻本の巻首(右)と巻末(左)



ア) 陰刻本(図一を参照)

○慶長七年金宣本

所蔵：京都久原文庫

刊記：慶長壬寅刊 金宣開版

\*この本の存在は、『日本古印刷文化史』附録「古刻書題跋集」により確認したが、実物や書影の過眼はできなかつた

○慶長九年涸轍堂本

所蔵：カリフォルニア大学バークレー校東亜図書館、陽明文庫、国文学研究資料館(起首に「起翦頗牧」がある半葉のみ)、国立国会図書館、東洋文庫、早稲田大学図書館

刊記：慶長甲辰孟春日 下涸轍堂新架

\*起首題名のところには篆書体の「四体千字」のみで、「文」字漏刻。第一三・一四丁の版心は上下中黒口双黒花口魚尾である。出版事項について、『我国における千字文の教育史的研究』「千字文資料編」にある出版社出版地項目に「下涸轍堂」と表記する

○慶長一一年春枝本

所蔵：京都久原文庫、カリフォルニア大学バークレー校東亜図書館、早稲田大学図書館、国立国会図書館、東京大学総合図書館、日本女子大学西生田図書館、筑波大学図書館、京都大学図書館、謙堂文庫

刊記：慶長甲辰孟春日 下涸轍堂新架

\*第一三・一四丁の版心は上下中黒口双黒花口魚尾である。

○慶長一一年金宣本

所蔵：カリフォルニア大学バークレー校東亜図書館、早稲田大学図書館、国立国会図書館、日本女子大学西生田図書館

刊記：慶長丙午歳 春枝開版

○慶長一一年讀本

所蔵：カリフォルニア大学バークレー校東亜図書館 早稲田大学図書館

刊記：慶長丙午歳 讀開版

○慶長一三年新七本

所蔵：早稲田大学図書館

刊記：慶長戊申 新七開版

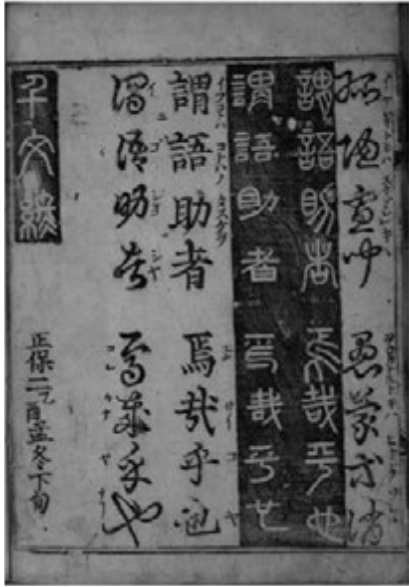
\*早稲田大学図書館所蔵本は九七六字(一ページ欠)

○秀意本

所蔵：国立国会図書館

刊記：秀意刊行

図二 篆隸陰刻楷草陽刻本の巻首（右）と巻末（左）



イ) 篆隸陰刻楷草陽刻本 (図二を参照)

○正保二年林甚右衛門本

所蔵：早稲田大学図書館、九州大学中央図書館

刊記：正保貳乙酉曆 三條通菱屋町ふ屋 林甚右衛門

○正保二年田原平兵衛本

所蔵：早稲田大学図書館、日本女子大学西生田図書館、謙堂文庫

刊記：正保貳乙酉曆 大坂順慶町一丁目筋 田原平兵衛梓

○正保二年本

所蔵：早稲田大学図書館、石川県立図書館川口文庫、四天王寺大学図書

館旧恩頼堂文庫、カリフォルニア大学バークレー校東亜図書館

刊記：正保二乙酉孟冬下旬

○刊記のない本

所蔵：早稲田大学図書館、静岡県立中央図書館葵文庫、関西大学図書館、

日本女子大学西生田図書館、和歌山大学附属図書館、京都大学図書館

刊記：なし

\*静岡県立中央図書館葵文庫所蔵本の末葉陰刻篆書「千文終」の下順次

に楯円の「昭和35.8.23 登録124018 静岡県立葵文庫」印・四角の

「728/31」・白文「源菅麻呂」印・小印（不鮮明のため判読不能）と有

り。印裏見返しに「駿府奈吾屋神官大井氏之藏書」と「奈吾屋神官藏

書」と有り

関西大学図書館所蔵本の題簽の書名：「天保校正千字文」

早稲田大学図書館所蔵本の裏遊紙に「寛永十三年十月十八日（朱印）」

と墨書。題簽に「寛永版」と有り

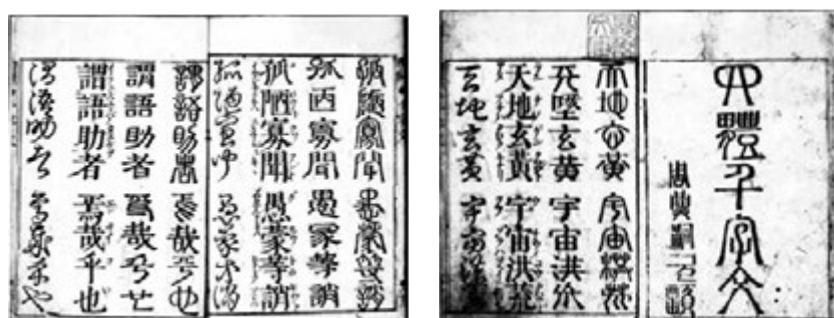
お茶の水図書館（石川武美記念図書館）成實堂文庫所蔵本には、裏見

返しに徳富蘇峰の明治35年の識語に「此書元和寛永前後之版也」と有

り。印記「蘇峰清賞」ほか



図三 陽刻本の巻首（右）と巻末（左）



刊記：林正五郎梓

○伊勢屋正三郎本

所蔵：夢望庵文庫、早稲田大学図書館

\*正文末に「林正五郎梓」の刊記が有る。末葉「一止人藏版書目録」の奥書「皇都書肆寺町五条上ル田丁額田氏伊勢屋正三郎梓」である

○延宝三年松会本

所蔵：早稲田大学図書館

刊記：乙卯六月吉日 松会開板

\*刊年の「延宝三年」は「早稲田大学図書館蔵尾形裕康収集千字文資料目録」に所載の「延寶三年の月松會」により確認したことである

### 第三章 諸本の異同について

諸伝本の内容について、巻首の題名「四体千字文」の右下に「周興嗣次韻」があり、表一「諸伝本の共通点」に示した通り、各本いずれも「周興嗣」は「次韻」よりやや小さく、字形や位置もほぼ一致している。篆隸楷草四体で千字文を刻み、各本の本文の楷書体の左右に返り点・送り仮名・振り仮名（音訓）を附している。陰刻本・篆隸陰刻楷草陽刻本・陽刻本いずれも序文・跋記がないので、編集者・筆者は知られない。底本は中国または朝鮮より齎されたものか、日本人が編集したのか明らかにはされない。

陰刻本七本の内に、慶長七年金宣本の実物が無いことを除けば、残りの六本のいずれも書体順列・装丁様式・刊刻様式・匡廓界線様式・文字詰め・読本様式と位置はほぼ一致し、乱丁・落丁も見られない（その内、慶長九年涸轍堂本の篆書体題名に「四体千字」のみある）。諸本の大きさについて、それぞれの所蔵機関の記載に些細な違いがある。例えば、「慶長一年春枝本」の大きさについて、東京大学総合図書館の書誌詳細に二八×二〇センチと表記しているが、日本女子大学西生田図書館には二六・九×一九・五センチとある。同一の伝本でも大きさの表記に違いが

ウ) 陽刻本（図三を参照）

○延宝三年青木勝兵衛本

所蔵：愛媛大学図書館鈴鹿文庫

刊記：延宝三乙卯初春 青木勝兵衛

○林正五郎本

所蔵：早稲田大学図書館

表一 諸伝本の共通点

| 陰刻本 | 篆隸陰刻楷草陽刻本 | 陽刻本 |       |
|-----|-----------|-----|-------|
|     |           |     | 巻首の題名 |
|     |           |     | 周興嗣次韻 |
|     |           |     | 訓点の位置 |

\*左から慶長九年潤轍堂本、慶長一年春枝本、慶長一年金宣本、慶長一年讀本、慶長一三年新七本、秀意本、正保二年林甚右衛門本、正保二年田原平兵衛本、正保二年本、刊記のない本、延宝三年青木勝兵衛本、林正五郎本、伊勢屋正三郎本、延宝三年松会本である。\*「/」は内容がないことを示す。

表二 三種の書誌詳細の比較

| 種類    | 陰刻本                         | 篆隸陰刻楷草陽刻本                   | 陽刻本                         |
|-------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 版式形態  |                             |                             |                             |
| 刊刻様式  | 陰刻、左り版                      | 篆隸陰刻、楷草陽刻、左り版               | 陽刻、左り版                      |
| 書体    | 篆・隸・楷・草                     | 篆・隸・楷・草                     | 篆・隸・楷(活字)・草                 |
| 装丁    | 一冊四二丁、大本                    | 一冊三六丁、大本                    | 一冊六二丁、小本                    |
| 匡廓・界線 | 天地单边、無界                     | 天地双边、無界                     | 天地单边、無界                     |
| 版心    | 上下中黒口双黒魚尾、版心に「千字文」、丁数あり     | 上下中黒口双黒魚尾、版心に「千字文」、丁数あり     | 模様なし、版心に「訂正 千字文」、丁数、黒丸あり    |
| 文字詰め  | 每半葉六行八字                     | 每半葉七行八字                     | 每半葉四行八字                     |
| 読本様式  | 本文の楷書体の左右に返り点・送り仮名・振り仮名(音訓) | 本文の楷書体の左右に返り点・送り仮名・振り仮名(音訓) | 本文の楷書体の左右に返り点・送り仮名・振り仮名(音訓) |
| 序文    | なし                          | なし                          | なし                          |
| 跋記    | なし                          | なし                          | なし                          |

あるのは、測定の誤差によるものだと考えている。

篆隸陰刻楷草陽刻本にある刊記のない本の諸本について、関西大学図書館所蔵本の題簽の書名に「天保校正千字文」と表記している。「早稲田大学図書館蔵尾形裕康収集千字文資料目録」の「注記事項」には「裏遊紙に「寛永十三年十月十八日(朱印)」と墨書。題簽に「寛永版」と有り」の記述がある。お茶の水図書館(石川武美記念図書館)の書誌詳細には「裏見返し徳富蘇峰の明治32年の識語に「此書元和寛永前後之版也」と有り。印記「蘇峰清賞」ほか」の記述がある。これらの記述を見ると、刊記のない本の刊行年代について、定説は示されていない。刊記のない本の全では同本とは言えないが、いずれも刊記が付いていないことにより、本稿では刊記のない本に属することにした。
















篆隸陰刻楷草陽刻本四本を陰刻本と比較すると、大まかな違いは、刻みの違いである。陰刻本の全文は陰刻で施され、黒地に白字の効果が表れている。篆隸陰刻楷草陽刻本は篆書と隸書の部分は陰刻を、楷書と草書は陽刻でそれぞれ施され、篆隸は黒地に白字、楷草は白地に黒字であ

る。また、文字詰めにも違いがある。表二「三種の書誌詳細の比較」に示した通り、陰刻本の文字詰めは毎半葉八字六列であるが、篆隸陰刻楷草陽刻本は毎半葉八字七列である。本の大きさについて、九州大学中央図書館所蔵の正保二年林甚右衛門本の書誌詳細に二七・五×一九・二センチと表記している。日本女子大学西生田図書館所蔵の正保二年田原平兵衛本は二六・三×一八・五センチである。同館所蔵の刊記のない本は二七・四×一九・五センチである。この区別は陰刻本と同様に、それぞれ測定の違いと見てよい。篆隸陰刻楷草陽刻本と陰刻本の大きさは二六・三×一八・五（二八×二〇センチの間にある。このようなサイズは基本的に大本のサイズ約二七×二〇センチに適合する。したがって陰刻本と篆隸陰刻楷草陽刻本ともに大本であることは明らかである。

前述の陰刻本と篆隸陰刻楷草陽刻本の分類によれば、二種を直接結びつけることは難しい。しかし、諸本を見比べ、筆画の太さという観点から見ると、両者の間にはある程度のつながりがあるように思われる。まず、一丁目表の「天」の太さを例として、陰刻本諸本の慶長九年涸轍堂本、慶長十一年春枝本と秀意本の筆画は細い。慶長十一年金宣本、慶長十一年讀本、慶長十三年新七本の筆画は太い。篆隸陰刻楷草陽刻本諸本の正保二年本の筆画は細い。正保二年林甚右衛門本、正保二年田原平兵衛本、刊記のない本の筆画は太い。表三「四体千字文」の筆画の太さ別分類」に示した通り、筆画の太さだけで区別すれば、陰刻本と篆隸陰刻楷草陽刻本の内に「細本」（筆画が細い本）と「大本」（筆画が太い本）と分類することができる（「慶長七年金宣本」の実物がなかったため、比較をしない）。

筆画の太さによって、さらに陰刻本と篆隸陰刻楷草陽刻本諸伝本を陰刻細本、篆隸陰刻楷草陽刻細本、陰刻大本、篆隸陰刻楷草陽刻大本と分別できる。このような分類を踏まえて、さらに細本と大本の内容を比較してみると、細本諸本と大本諸本とは文字の書き方においてほとんど一致する特徴が見られるが、「辰宿列張」の「宿」の書き方には明らかな違いがある。まず、表四「宿」に傷の有無によっての分類」に示した通り、陰刻細本の慶長九年涸轍堂本と篆隸陰刻楷草陽刻細本の正保

表三 「四体千字文」の筆画の太さ別分類

| 陰刻本   |  |   |  | 篆隸陰刻楷草陽刻本   |  |
|---|--|---|--|---|--|
| 慶長九年涸轍堂本  |  | 慶長十一年春枝本  |  | 正保二年本   |  |
|  |  |  |  |    |  |
|  |  |  |  |    |  |
| 陰刻本   |  |   |  | 篆隸陰刻楷草陽刻本   |  |
| 慶長十一年金宣本  |  | 慶長十三年新七本  |  | 正保二年田原平兵衛本  |  |
|  |  |  |  |    |  |
|  |  |  |  |    |  |
|   |  |   |  | 刊記のない本  |  |
|   |  |   |  |  |  |
|   |  |   |  | 細本  |  |
|   |  |   |  |  |  |
|   |  |   |  | 大本  |  |
|   |  |   |  |  |  |















二年本の内容は一致し、「宿」の「イ」部分は無傷である。一方、陰刻細本の慶長一一年春枝本、慶長一一年讀本、秀意本と陰刻太本の慶長一一年金宣本、慶長一三年新七本、篆隸陰刻楷草陽刻太本の正保二年林甚右衛門本、正保二年田原平兵衛本、刊記のない本はすべて、「宿」の「イ」部分の筆画が分けられ、「𠄎」の形である。このような違いは諸本の本文には散見される。このように、陰刻細本、陰刻太本、篆隸陰刻楷草陽刻太本は字の書き方の面で一定の関連がある。

太さと「宿」のような書き方の違いから、その底本に差異があると単純に断定することはできない。これらの違いは、底本の傷や墨痕によつて、読み取りが不明瞭になったことによるものと考えられる。諸本の書き方には一致しないところがあるが、他には一致した特徴を示しているからである。たとえば、陰刻本の慶長九年潤轍堂本と慶長一一年讀本の「宿」の書き方は異なるが、版心の特徴においては、二本とも他の伝本とは異なる共通点があり、慶長九年潤轍堂本と慶長一一年讀本の第一三・一四丁の版心はいずれも上下中黒口双黒花口魚尾である。翻刻についてははつきりした記載はないが、この特徴は少なくとも二本が翻刻の際で使っている底本と同じ版心の特徴を持っていることを示している。諸伝本は、太さ、書き方、書誌特徴において異なっているが、これらの区別は、双鉤または版を彫る際の誤差と見られ、陰刻本と陽刻本を別の版種と言うのは難しい。

篆隸陰刻楷草陽刻本と陰刻本の違いがそれほど大きくない場合に比べて、陽刻本と以上二種の違いはさらにはつきりしている。陽刻本の大きさについて愛媛大学図書館鈴鹿文庫所蔵の延宝三年青木勝兵衛本、早稲田大学図書館所蔵の林正五郎本、夢望庵文庫所蔵の伊勢屋正三郎本は、いずれも十五・五×一・一センチである。早稲田大学図書館所蔵の延宝三年松会本は一四×一〇センチである。これによると、陽刻本は小本のサイズ約一七×一二センチよりもっと小さい。『早稲田大学図書館蔵尾形裕康収集千字文資料目録』の記述の通り、陽刻本の諸本は改装本として、小本の形になったわけではないであろう。刊刻様式、装丁、匡廓・界線、版心、文字詰めの区別以外に、陽刻本に使われる各書体に差異があり、楷書体部分に活字体が使

表四 「宿」に傷の有無によつての分類

|   |   |   |   |   |  |   |  |   |  |           |
|---|---|---|---|---|--|---|--|---|--|-----------|
| 慶長九年潤轍堂本  |   | 正保二年本   |   | 延宝三年青木勝兵衛本  |  | 林正五郎本   |  | 伊勢屋正三郎本   |  | 「宿」に傷のない本 |
|  |   |  |   |  |  |   |  |  |  |           |
| 慶長一一年春枝本  | 慶長一一年讀本   | 秀意本   | 慶長一一年金宣本  | 正保二年林甚右衛門本  | 正保二年田原平兵衛本   | 刊記のない本  |  | 「宿」に傷のある本   |  |           |
|   |  |  |  |  |  |  |  |   |  |           |

\*「延宝三年松会本」と「慶長十三年新七本」は一丁裏の画像がないが、所蔵機関に閲覧する時に、「宿」の「イ」部分の筆画が分けられることを確認した。

われていることは最大の相違である。「宿」の「イ」部分の筆画は、陽刻本の諸本いずれも無傷であるが、本文全体の字形は篆隸陰刻楷草陽刻本、陰刻本と比べると、大きく異なっている。

#### 第四章 佚名「四体千字文」の機能の変遷

尾形裕康氏が「使用頻度の高い千字文をもって構成されている千字文は、漢字学習のために絶好の教材であった」<sup>15)</sup>と指摘しているように、応神天皇十六年(二八五)の王仁の渡日に際し、一〇巻の『論語』とともに一巻の『千字文』を日本に持渡してから、「千字文」は漢字学習の教材として用いられてきた<sup>16)</sup>。漢字の学習には読むことと書くこととの両方が含まれている。

前述の佚名「四体千字文」の諸本の注目すべき点は、諸本の楷書体の左右に返り点・送り仮名・振り仮名(音訓)が附されていることである。これは佚名「四体千字文」が読書と習字を兼ね備えた複合的な書物であることを示している。

中野三敏は『和本之海』に近世初期に開板された佚名「四体千字文」について、「『四体千字文』など、普通の整版本を作るのと同じく、左文字(逆文字)の版を作るので「左り版」といい、文字を陰刻して書面は白抜き文字となるように作ると、見かけは拓本と同様なので「石摺り」と総称していた。ただし、陽刻して墨字となるものも並にして作られている」<sup>17)</sup>と指摘し、「千字文」に始まって、「赤壁賦」「愛蓮説」、あるいは「古今和歌集」や「仮名消息」等々、唐様・和様

とりまぜての手習いの手本としてつくられてもの」と述べているように、黒地白字の書面は一目で法帖の形とわかる。慶長年間に刊行された陰刻本「四体千字文」諸本が陰刻され、黒地白字の書面が見られる。陰刻で篆隸楷草四つの書体が刻まれた「四体千字文」は、第三章に述べた周伯温「四体千字文」と同じように篆隸楷草四体の習字に手本として使用されたの言うまでもないであろう。したがって、拓本(石摺)の書面特徴がある陰刻本は習字手本としての特徴が顕著である。しかし、佚名「四体千字文」の篆書について、岩坪充雄は「慶長十一年の篆書は

その形も粗末で、そこに筆意もなにも感じないのである」<sup>18)</sup>と指摘しているように、法帖制作の初期段階において、印刷技術や底本の品質不良などの制約により、近世初期に刊行された佚名「四体千字文」諸本は良い習字手本とは言えない。

正保年間に刊行された篆隸陰刻楷草陽刻本「四体千字文」諸本も、陰刻の篆隸は黒地白字で篆隸書の習字手本としての特徴が明らかである。一方、陽刻の楷草書部分は白地黒字で、習字手本としての特徴が弱くなり、読むことまたは篆隸書を読み取るための書物という機能が強くなった。延宝年間に刊行された陽刻本、特に楷書部分が活字体に改刻されることにより、佚名「四体千字文」の漢字熟語学習の機能が最も強くなった。さらに、陽刻本諸本いずれも小本の形であることも、漢字熟語学習のために作られたことを示すとともに、携帯や使用の便のために作られていることを示している。

前述諸本以外に、享保二年(一七一七)に京都の出雲寺和泉掾が開板した『懷宝節用集綱目大全』と文化九年(二八二二)に京都の出雲寺文次郎が開板した『懷宝節用集綱目』には、「四体千字文」が収録されている。この本の奥付の「寛延三祀孟春吉旦彫刻 京師店三條通升屋町御書物所 出雲寺和泉掾 文化九祀季冬吉辰再刻 出雲寺文次郎」によると、これは寛延三年(一七五〇)に出雲寺和泉掾が版を彫刻し、上梓したものに基づいて、文化九年(一八一二)に再刻し、上梓したものである。

享保二年『懷宝節用集綱目大全』の「四体千字文」は陽刻で本文前の四丁表から二四丁裏まで、每半丁一二行八字である。各書体の配列は前述諸本と同じく、篆隸楷草で、楷書の左右にも返り点・送り仮名・振り仮名(音訓)が附されている。二四丁裏の左に千字文の説明文がついている。文化九年『懷宝節用集綱目』の「四体千字文」は陽刻で本文後の一三九丁表から一五八丁裏まで、每半丁一二行八字である。各書体の配列は前述諸本と違い、楷篆草隸で、楷書の左右にも返り点・送り仮名・振り仮名(音訓)が附されている。一五八丁裏の左には、千字文の説明文がついている。二本が収録されている「四体千字文」の書体の配列の

区別以外に、文化九年版の内に、篆書体を改刻するところも散見される。

節用集は、一五世紀に誕生したイロハ・意義検索の用字集・語彙集である。二本の巻末に同じような題記「今代節用集類本甚多、雖然其体紛雜、而難用急卒之便、故、今増益文字、新彫梓為懷中本、名懷宝節用集綱目、令改版者也」によると、前述陽刻本の「四体千字文」の延長として、漢字熟語の検索のために、『懷宝節用集綱目』に収録されているのである。

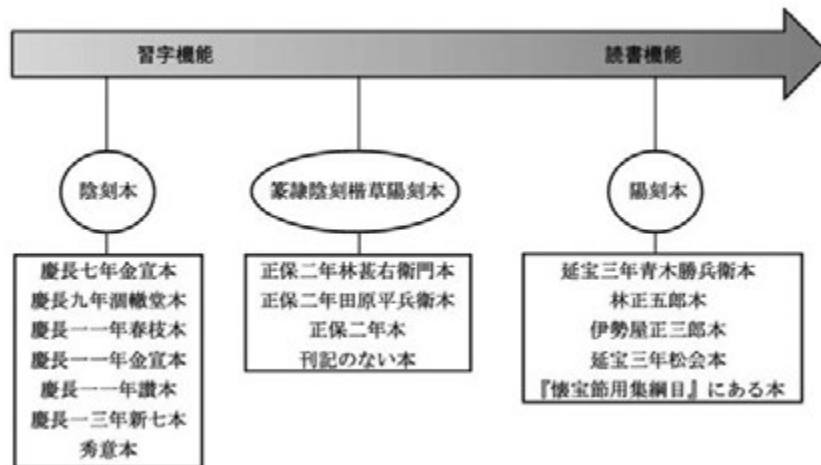
### おわりに

篆・楷・草・行型の「天文十九年日州本」はすでに散逸したが、僅かな記録によると、この本は学者・武士との関係がある者「弓削雅楽入道交雲居士」により上梓され、書学習における、習字手本として取り扱われたものと推察される。したがって、日本初の書と関係の深い刊本千字文であるとみて良い。

篆・隸・楷・草型の佚名「四体千字文」は書面の差異によって、ア)陰刻本・イ)篆隸陰刻楷草陽刻本・ウ)陽刻本に分類することができる。陰刻本と篆隸陰刻楷草陽刻本の筆面の太さの方面から比べてみると、陰刻太本、陰刻細本、篆隸陰刻楷草陽刻太本、篆隸陰刻楷草陽刻細本と分けて良い。だが、諸伝本における「宿」字の書き方が異なるところがあることによれば、陰刻細本の慶長九年潤轍堂本と正保二年本は同じく、無傷である。その他の諸本には全て傷がある。また、慶長九年潤轍堂本と慶長一一年讀本の版心が共通することから、諸伝本の中に複雑な関係があり、簡単に分類することはできない。これは近世初期における印刷技術の不備が原因となつたのではないかと考えている。

一方、諸伝本の書面の差異、いわゆる陰刻本から篆隸陰刻楷草陽刻本へ、最後に陽刻本になつたのは、佚名「四体千字文」の機能の変遷を表している。陰刻本は拓本の書面で、習字手本として使われる可能性が高い。篆隸陰刻楷草陽刻本は習字手本としての特徴が弱くなり、読むことまたは篆隸書を読み取るためという

機能が強くなつた。陽刻本は漢字熟語学習のために作られたことを示すとともに、携帯や使用の便のために作られていることを示している。近世中期に至るまで、『懷宝節用集綱目』に収録されることは、佚名「四体千字文」の漢字熟語学習(読書)機能の強化を表している。



- 1 木宮泰彦『日本古印刷文化史』（富士房、一九六五）の「附録 古刻書題跋集」に掲載される卷末刊記の「夫附言増広古文・真・草・行、凡四千字、為誨童蒙、合他力刻諸梓以伝世矣」によってわかるように、天文十九年日州本は古文（篆）・真（楷）・草・行の四書体を以て刊刻したものである。
- 2 『早稲田大学図書館蔵尾形裕康収集千字文資料目録』と『我国における千字文の教育史的研究』にある「千字文資料編」による。
- 3 『早稲田大学図書館蔵尾形裕康収集千字文資料目録』には、刊記なし、裏遊紙に「寛永十三年十月十八日（朱印）」の墨記、題簽に「寛永版」とあるが装本と刊記なし、裏見返しの徳富蘇峰の明治三七年の識語に「此書元和寛永前後之版也」とある本の記載がある。
- 4 和田維四郎『訪書余録』（臨川書店、一九七八）二二五頁。
- 5 吉沢義則『日本古刊書目』（文化図書、一九八四）二六三頁。
- 6 朝倉亀三『日本古刻書史』（国書刊行会、一九〇九）一〇五頁。
- 7 木宮泰彦『日本古印刷文化史』（富士房、一九六五）六六九頁。『日本古印刷文化史』の「古刻書題跋集」に『訪書余録』の所載が引用されている。
- 8 若山甲蔵『日向文献史料』（臨川書店、一九七五）四三頁。
- 9 若山甲蔵『日向文献史料』（臨川書店、一九七五）四六頁。
- 10 新村出編『広辞苑』第五版（岩波書店、一九九八）九五九頁。
- 11 戦国時代から安土桃山時代にかけての武将、日向国の戦国大名。日向伊東氏一代（伊東氏一六代）当主。伊東祐充・祐吉は同母兄弟。
- 12 平部嶠南『日向地誌』（日向地誌刊行会、一九二九）。
- 13 若山甲蔵『日向文献史料』（臨川書店、一九七五）四三～四四頁。
- 14 木宮泰彦『日本古印刷文化史』（富士房、一九六五）三五二～三五三頁。
- 15 尾形裕康『我が国における千字文の教育的研究』（校倉書房、一九六六）八六頁。
- 16 『諸本集成古事記』（古事記学会、一九五七）参照。『日本書紀』（吉川弘文館、一九五二～一九五三）には王仁を和邇吉師と記載する。
- 17 中野三敏『和本の海へ…豊饒の江戸文化』角川学芸出版、二〇〇九）一四二頁。
- 18 岩坪充雄「江戸時代の篆書体受容について——篆書関連書籍の翻刻・出版の事情より——」（『書学書道史研究』一五号、二〇〇五）五六頁。